

消費理論に関する次の問に答えよ。

(1) ケインズ理論における消費関数 ($C = \overline{C}_0 + c_1 Y$) の性質について次のキーワードを用いて説明せよ。

キーワード：限界消費性向、平均消費性向、利子率

(2) F.モディリアーニが唱えたライフサイクル仮説について説明せよ。また、次の前提に基づき、ライフサイクル仮説における消費と所得の関係についても説明せよ。

前提：初期保有資産が W_0 である個人 A が、今年 T 年間生きると予想し、R 年後に退職するまで年平均所得 Y を得る。A が初期保有資産と生涯所得を T 年間で消費し尽くすと仮定する

と、A の消費関数は $C = \frac{W_0 + RY}{T}$ となる。

(解説)

本問は (1) と (2) で1セットの問題となっています。前半ではケインズ理論についてあるいは短期消費関数について、後半ではライフサイクル仮説つまり長期モデルと短期モデルの両立について説明することが要求されます。解答に当たってはこの両者が理論的にどのように異なるのかその差が明確になるような書き方が求められます。(1) ではキーワードを使う事が求められていますので必ずそのキーワードを使うことと、そのキーワードの意味やそれがどのように関係するのかきちんと説明しましょう。

(解答例)

(1) 消費関数とはある一国の消費額がどのように決定されるかを示す関数である。ケインズ理論においてはある時期の消費は、所得に依存しない定数の消費額、基礎消費額に加えその期の国民所得の一定割合の合計として決定されると考えられている。この一定割合を限界消費性向とよぶ。このとき所得の一定割合を支出することから限界消費性向は通常1よりも小さい正の定数をとると考えられている。また、今期の支出額を今期の国民所得額の関数としていることから分かるように、貯蓄や借り入れを含んだ異時点間における資金の融通は仮定しておらず利子率が消費に直接的に与える影響は考えられていない。

→消費関数について聞かれているわけですから、消費関数とはどのようなものか一応断っておきます。また、ケインズ理論の前提ではある期の消費水準はその期の所得水準によ

って決まることにも触れておきます。また基礎消費額、限界消費性向とは何かということも明示して説明しておきます。あまりに基本的な国民所得などの用語はともかく、ケインズの消費関数について聞かれているわけですからそれに関連する用語はきっちりとどういふことなのか説明を入れておいた方がベターです。

これらの事を前提とすると、本問で示されている消費関数、 $C = \overline{C}_0 + c_1 Y$ においては \overline{C}_0 が基礎消費にあたり、 c_1 が限界消費性向、 Y が今期の国民所得を示すことになる。これは、横軸に国民所得 Y 、縦軸に消費額 C をとったグラフに描くと、切片が \overline{C}_0 、傾きが c_1 という直線で表されることになる。

→ここで消費関数の図を入れてもいいでしょう。ただし、図を複数入れる場合は必ず「図1」などのように名前を付けてください。

さてこのように消費関数を考えるとき、所得が上昇するにつれて所得に占める消費支出の割合、つまり平均消費性向は減少していくことになる。

→平均消費性向の説明もきちんと入れてください。また平均消費性向が逡減することを示すことが出題者が暗に要求していることのひとつです。

問題で与えられた関数を利用すれば平均消費性向は $\frac{C}{Y}$ で定義されるが、 $\frac{C}{Y} = \frac{\overline{C}_0}{Y} + c_1$ より、基礎消費 \overline{C}_0 、限界消費性向 c_1 が一定であれば、 Y の増加とともに平均消費性向は逡減することになるのである。この点がケインズ理論における消費関数の特徴のひとつである。しかし、このケインズ理論における消費関数は現実のデータと照らし合わせたときに矛盾が生じることが明らかになった。アメリカの長期にわたる時系列（タイムシリーズ）データから所得と消費の関係を推計したクズネッツの研究によると、消費関数は平均消費性向が一定の切片を持たない直線で近似でき平均消費性向が逡減する性質を持つケインズ型の消費関数は当てはまらなかったのである。その後、様々なデータによってケインズ型消費関数の実証研究がなされ、ある一定時期の様々な所得水準の家計を基にしたクロスセクションデータを用いた推計ではケインズ型の消費関数が当てはまることが明らかになった。つまり、ある一時点の短期的なデータではケインズ型の消費関数が妥当性を持つことが分かったが、長期的なデータでは妥当性を持たないのである。この点がケインズ型の消費関数が短期的な性質のものであると言われるゆえんである。

以上

(2)

ライフサイクル仮説は、(1) で示した短期と長期の消費関数の違いすなわち、短期的には平均所得性向は逡減するが、長期的には一定になるのはなぜかと言うことを説明するものである。この仮説の特徴的なところは、人々が今期の消費額を決定する主な要因が今期の絶対的な所得ではなく、自分が一生の間にどれだけの所得があるか、つまり生涯所得にあるとするところである。つまりある人が一生の間に使える所得の総額を自分が生きる年数で割れば、一年あたりどれだけの消費をすることができるか分かる。このようにして今期の消費額が決まると考えるのがライフサイクル仮説の特徴である。

さて、では問題に与えられた前提を基にこのライフサイクル仮説を考えていくことにする。題意よりこのライフサイクル仮説の消費関数が $C = \frac{W_0 + RY}{T}$ と与えられている。ここ

で分子はこの個人が初期に保有する資産 W_0 と RY つまり生涯賃金所得の合計値である。これが意味するのはこの個人が生涯にわたって消費できる金額である。それを生きる年数 T で割れば今期の消費額 C が決まると考えるものである。しかしこの理論にはこのままでは少し難点がある。それは人々が自分の生涯所得を正確に予測できるかどうかということである。生涯所得は現時点では確定していない所得であり予想値にすぎないのである。また、後何年生きるかという事に関しても正確な予測はできない。そこで前者に関しては今年の所得をもとに平均所得 Y を想定すると仮定し、今年の所得 $= Y$ と考えるのである。後者に関しては、人々が自分の生きると予測する年数よりも若干余裕を持って T を設定すると考えればよい。こうしたことを念頭にこの消費関数から平均消費性向を求めてみる。両辺を Y で割ると

$$\frac{C}{Y} = \frac{W_0}{T} \times \frac{1}{Y} + \frac{R}{T} \quad \text{となる。これが、ライフサイクル仮説の平均消費性向であるがこれ$$

が一定ならば長期的な消費関数を意味し、逆に Y の増加とともに逡減していけば短期的な消費関数を意味することになる。ここで、右辺の第2項 $\frac{R}{T}$ は定数である。短期的には右辺

の $\frac{W_0}{T}$ も定数であるから (W_0 は変わらない)、 Y が増加すれば平均消費性向 $\frac{C}{Y}$ は減少して

いく。つまり $C = \frac{W_0 + RY}{T}$ は短期的な消費関数を意味することになる。しかし、長い目で

見れば人の資産 W は所得 Y の増加とともに比例的に増えていく事が予測されるから、 W を長期におけるある年の資産額とすれば $\frac{W}{T} \times \frac{1}{Y}$ は常に一定となる。よって平均消費性向は資産

が所得とともに増加する長期においては一定となり、ライフサイクル仮説の消費関数

$C = \frac{W_0 + RY}{T}$ は長期消費関数を示すことになる。

このようにライフサイクル仮説では短期では平均消費性向が逡減、長期では一定とな

り、ケインズ理論における短期消費関数とクズネッツが発見した長期消費関数との両方を矛盾無く説明できるのである。

以上